

# 平成16年10月台風23号の豪雨に襲われ、円山川の堤防が決壊した経験をされた、中貝豊岡市長が「豊岡市はどのようにして台風災害と闘ったか」を演題として特別講演を行いました。

## 概要

- 目的：水害から国民の生命、財産を守り、安全で快適な生活環境の確保を図るため、本大会を開催し、近畿各府県の総意を集結して国へ働きかけることによって、治水事業の強力な推進とともに災害発生時の速やかな対応並びに多様な治水対策措置などを推進していく。
- 日時：平成27年11月9日（月）
- 場所：アオッサ 8F 福井県民ホール
- 主催者：福井県、全国治水期成同盟会連合会、福井県治水海岸協会

今回の特別講演については、関東・東北豪雨を受けた「避難を促す緊急行動」の一環として、首長や地方公共団体職員等を対象に平成16年10月台風23号の豊岡市の対応などを講演し、災害発生時における速やかな対応の必要性を講演されました。

### 【講演概要】

- ・円山川、風が無いと美しい風景を見せてくれるが、河川勾配が極端に小さい。これは水はけが悪いことを意味する。
- ・2004年10月、台風23号の豪雨に襲われ、円山川の堤防が決壊し、街は泥の海に沈んだ。
- ・当時、避難勧告を発令した対象が43,000人であったが、市が公式に設置した避難所に避難した人は3,800人、合併後でも60,000人に対して5,700人と1割にも満たない数。これが大問題になる。
- ・人命救助のあとは、ごみと泥との闘い。人々は泣くような思いで頑張った。
- ・被災した人々を絶望の淵から助けてくれたのはボランティアの方々だった。ボランティアは単なる労働力ではなく、町が明るくなる。
- ・死者数は結果として決定的なものであるが、数字そのものは重要ではない。一人一人の日常生活が奪われた時に、その周りの家族がどれほど苦しむのか、そういうことを思い、我々が何を失ったかを考えないといけない。
- ・円山川堤防決壊現場は、激特事業で強くてきれいに復旧した。それ以外にも様々な復旧をして頂き、とてもありがたいこと。しかし本音を言えば、この光景をあの水害の前に見たかった。それが私たちの偽らざる気持ちである。
- ・国の治水予算は激減し、大変なことになっている。大水害のあったところは、確実に、早く、手厚く対応されるようになった。その結果、他への予算は厳しい。何を意味するか、予防的な治水事業予算が少ないということは、極端なことを言うと被害にあわないとやってもらえない。そういった情けない状態が私たちの国の状況です。
- ・皆さんと力を合わせてこの状況を少しでも改善していきたい、と強く願っている。

中貝豊岡市長の講演



会場の風景



【講演概要（つづき）】

- ・台風23号の教訓。大きな災害はこれからも必ずやってくる。その時は逃げる、これしかない。しかし人は逃げない。専門家曰く正常化の偏見と呼んでいる。私たちの心には、自分に迫りくる危険を過少に評価して心の平穏を保とうとする非常に強い力があるそうだ。
- － NHK 山崎解説委員著『災害情報が命を救う』より －
- ・旧郡山町（鹿児島市） 93年、土砂災害43戸 犠牲者なし 防災無線で呼びかけ 絶えず刻々とひどくなっていく危険の度合いをその都度伝えながら、災害対策本部の危険の恐怖感を一緒に持ってもらふ、それでなければ人は逃げない、ということになる。
- ・毎年のように失敗が繰り返されている。いくつかの市が中心となって水害サミットをひらき、大水害を経験した首長の情報交換をしている。それをもとに水害対策のノウハウ本を出版した。その中に、災害時にトップがなすべきことを一番初めに記載している。大水害にあった首長の痛恨の思いを込めた文章。各首長にはぜひ読んでもらいたい。

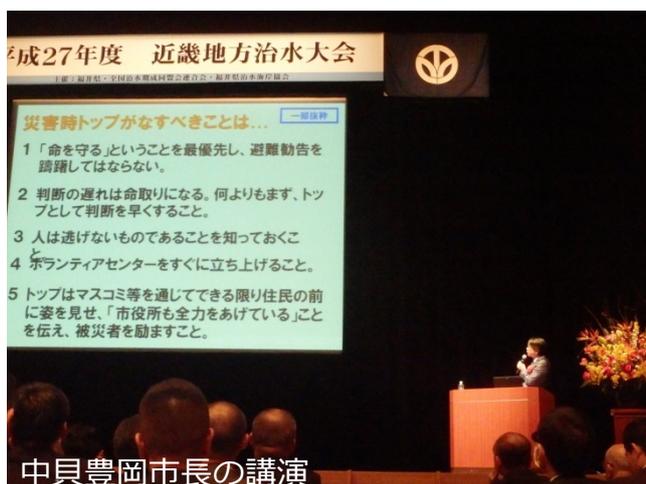
基調講演の中で、当時の豊岡市の判断について時系列に説明し、聴講された方に疑似体験を促すよう臨場感のある講演をされました。

以下に説明された内容について整理します。

日時	豊岡市の行動など
平成16年10月20日 16時10分	災害対策本部設置
同日 16時15分	豊岡河川国道事務所長から直接電話。このまま降り続ければ、21時ごろに計画高水位を超える、とのこと。しかし信じるが出来なかった。そのような早いスピードで円山川の水位上昇の経験を我々は持っていなかった。老人ホームなどに避難準備の連絡。
同日 17時40分	豊岡河川国道事務所長から再び電話 19時には計画高水位を超える可能性がある。
同日 18時 5分	避難勧告発令 この間、25分、何をしていたのか。防災無線の原稿準備に手間取っていた。
同日 19時13分	避難指示に切り替え
同日 19時20分	担当課長より国交省がポンプ停止の依頼を伝えてきた。内水を本流に排水することを止めないと堤防決壊の危険性があった。それは死者の可能性を意味する。もはや選択肢はなくポンプは順次停止せざるを得なかった。結果、街は水浸しになった。
同日 23時15分	円山川の堤防決壊
同日 23時45分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市民に放送。「堤防が破堤しました。水位が急上昇します。2階以上の高い所へ避難してください」と放送をした。この間、30分、何をしていたのか。やはり原稿準備に手間取っていた。破堤という穏やかな響きの言葉が良いのか、決壊というようなおどろおどろしい言葉が良いのか、どの範囲に発令するのが良いのか・・・ この30分が私たちの大きな悔いとして残っている。そして災害対策本部は機能不全に陥った。もはや何もできなかった。</li> <li>・テレビでは、舞鶴の水没バスの上で37人が助けを求めていたが、なにもできなかった。</li> <li>・堤防決壊現場近くでは7人が屋上で助けを求めていた。自衛隊や海上保安庁、県の防災ヘリの出動を要請したが、夜間、暴風雨であり出動が出来ず。</li> </ul>
平成16年10月21日 3時45分過ぎ	市長、マイクを持って放送。「円山川の水位を見て、水門を開く予定。我々も全力を尽くす、皆さんも頑張ってください。」
同日 6時50分	再びマイクを持つ。「陸上自衛隊が到着。間もなく活動開始。県防災ヘリ、消防救助隊も到着の予定。」

## 災害時にトップがなすべきことは…

1. 「命を守る」ということを最優先し、避難勧告を躊躇してはならない。
2. 判断の遅れは命取りになる。何よりもまず、トップとして判断を早くすること。
3. 「人は逃げない」ということを実感した。人は逃げないものであることを知っておくこと。  
人間の心には、自分に迫りくる危険を過小に評価して心の平穏を保とうとする強い働きがある。避難勧告のタイミングはもちろん重要だが、危険情報を随時流し、緊迫感をもった言葉で語る等、逃げない傾向を持つ人を逃げる気にさせる技を身につけることはもっと重要である。
4. ボランティアセンターをすぐに立ち上げること。ボランティアは単なる労働力ではない。ボランティアが入ってくることで、被災者も勇気づけられる、町が明るくなる。
5. トップはマスコミ等を通じてできる限り住民の前に姿を見せ、「市役所も全力をあげている」ことを伝え、被災者を励ますこと。自衛隊や消防の応援隊がやってきたこと等をいち早く伝えることで住民が平静さを取り戻すこともある。
6. 住民の苦しみや悲しみを理解し、トップはよく理解していることを伝えること。苦しみと悲しみの共有は被災者の心を慰めるとともに、連帯感を強め、復旧のばねになる。
7. 記者会見を毎日定時に行き、情報を出し続けること。情報を隠さないこと。マスコミは時として厄介であるし、仕事の邪魔になることもあるが、情報発信は支援の獲得につながる。明るいニュースは、住民を勇気づける。
8. 大量のごみが出てくる。広い仮置き場をすぐに手配すること。畳、家電製品、タイヤ等、市民に極力分別を求めること(事後の処理が早く済む)。
9. お金のことは後で何とかなる。住民を救うために必要なことは果敢に実行すべきである。とりわけ災害発生直後には、職員に対して「お金のことは心配するな。市長(町村長)が何とかする。やるべきことはすべてやれ」と見えを切ることも必要。
10. 忙しくても視察は嫌がらずに受け入れること。現場を見た人たちは必ず味方になってくれる。
11. 応援・救援に来てくれた人々へ感謝の言葉を伝え続けること。職員も被災者である。職員とその家族への感謝も伝えること。



(水害サミット議事録から)  
出展：水害サミットからの発信

<http://www.mlit.go.jp/river/suigai/>